

第1回（仮称）浦和駅周辺まちづくりビジョン有識者懇話会 議事録概要版

【テーマ】2050年に目指すべきまちの将来像について

【開催日】令和3年8月28日（土）13：30～15：00

【参加者】隈研吾会長、安藤梢委員、市川淳平委員、坂井貴文委員、田口裕基委員、鳥羽三男委員、廣瀬通孝委員、向井亜紀委員、安河内眞美委員、清水勇人座長

【意見概要】

（隈会長）

- 浦和のまちにはファンや文化資源など、地域の宝が多い。地域の宝をどう生かし、つないでいくかがテーマになる。
- 歩いて楽しめるウォークアブルなストリートも多い。ウォークアビリティは今後の世界基準になる。
- 別所沼公園や通りの並木など、身近に自然を感じられるヒューマニズムなまちが特徴。
- 20世紀は車中心の時代であったが、21世紀は人中心の時代である。

（安河内委員）

- 浦和は、文化・教育の土台があり、素晴らしい。区民の意識も高い。
- 教育の場で、より美術を学ぶべき。美術が身近に感じられる環境づくりが必要。
- 若い家族が楽しめるような、スポーツ&アートのバランスの取れた歩きやすいまちが理想。

（坂井委員）

- 文教都市浦和は明治・大正期に作られたもの。当時は学生や教員が多くまちにいた。
- 今後も学校機能の強化は不可欠。人生100年時代の教育の発信拠点となれると良い。（リカレント教育、リスキリング教育）

（安藤委員）

- サッカーの試合が行われる日、まちなかは真っ赤に染まる。海外のクラブのように、サッカーがまちに沁みついている。サッカーのまち・浦和。
- スポーツを通じたコミュニティ形成が重要。

（廣瀬委員）

- “リモート”がキーワード。もしもの時のために、バーチャルを備え、活動を止めないことが重要。
- 今後はバーチャル空間や情報をまちの基盤に備えていくこと、デジタルツインが重要。（仮想空間、バーチャルワールド、パラレルワールド、多重利用）
- 高齢者問題にこそ、バーチャル技術の活用が必要。

（向井委員）

- 浦和に思い入れがあり、今後に期待したい。
- 「のんびり、ゆっくり、しっかり」と浦和の良さを継承しながら発展してほしい。
- 女性が活躍できる、無理しないで生活できる社会構築も重要。パリや台湾が参考になる。
- 親子3世代のまち歩きから共に新たなまちを築けるような、新たな文化を育むようなまちにし

たい。

(市川委員)

- 浦和と言えば、「レッズ」と「伊勢丹」。サッカーのまち・浦和をアピールしている。
- 大宮と浦和の特徴・違いが、「大宮」は商業・業務のまち。「浦和」は居住（住宅）のまち。
- 浦和では、大宮に比べ、保育所など居住サービス系の施設の需要が高い。
- 商売や生活でのトラブルも少なく、安心・安全なまち。

(田口委員)

- 浦和駅周辺の人口は過去 10 年増加傾向にあり、駅周辺の商業環境としては素晴らしい。
- 調神社をはじめ伝統ある落ち着いた街並みが残っている。
- サッカーのまちとして情熱があり、勉強とスポーツを両立する考えで子育てをする方々が増えている。
- 浦和レッズをはじめ、高砂小学校など、地元とのコラボ活動も展開しており、地域との共存共栄に取り組んでいる。
- 浦和のお客様を大切にして、今後も一緒に発展していきたい。

(鳥羽委員)

- 浦和には「浦和」と名の付く駅が8つある。
- 浦和駅の乗降客数は全国第 37 位。
- 浦和駅周辺は、静かで落ち着いていて魅力がある。
- 浦和の文化・教育、食やスポーツなど、地域の魅力を駅から発信していきたい。
- 住んで良かった、学んで良かった、働いて良かった、訪れて良かったと感じられるまちづくりを駅からも進めていこうと考えている。

●コロナ後の不動産ニーズについて（限会長→市川委員）

- 飲食店やアパレルは撤退傾向にある一方で、保育園などのニーズが高い。
- コロナで難しいものと何とかなるものが分かれてきた印象。

●浦和のまちの伸ばしたい部分や残したい部分について（限会長→向井委員）

- ほっとできる景色や懐かしさ、ノスタルジーを感じられる空間。

●浦和ならではの DX 化、情報の使い方について（限会長→廣瀬委員）

- 開発と保全（保存）のバランスが重要。
- 大きな観光資源はそれほどないが、街全体としてはすごく面白い。エンタロピーが高い。
- 浦和という駅は8つあり、浦和を象徴していて、分散的である。これらの対応として、情報が得意。ライフログという技術があって、色々なデータをビックデータとして集め、それを色々な方向から、各人毎が利用するなど。

●どんなまちであって欲しいかについて（清水座長→坂井委員→限会長）

- ゆっくりしたまち、落ち着いたまち、それとウォークアブルなまち。
- 路地など界隈性のある空間も魅力的であり、若者が増えるきっかけになると良い。
- 路地の面白さは、「モノ（ベンチや植栽）」と「人（使う人、通過する人）」の劇

●スポーツを通じたまちづくりについて（清水座長→安藤委員）

- 駒場スタジアムはサッカーの聖地、浦和の聖地。9月よりWEリーグがスタートする。

- 浦和の良さを感じながら、スタジアムに向かって来れるよう、浦和駅周辺や駒場スタジアムまでの道のりが楽しんでもらえるようなまちづくりができるとうい。

●**賑わいの核である駅前エリアの空間活用について（清水座長→田口委員→隈会長）**

- 伊勢丹では「デパ地下」ならぬ「デパ空」を企画中。コロナ禍の三密回避に向けて、ビルの屋上を地域住民のために開放し、屋上空間の活用を検討している。
- 屋上は空に近い有効な資源であり、屋上利用は世界中の新しいムーブメント。

●**交通の要である浦和駅について（清水座長→鳥羽委員→隈会長、向井委員）**

- 多世代の交流、コミュニティの強化に加え、防災も重要。
- 駅周辺は重要な拠点であり、防災空間としても駅周辺をリ・デザインすることがこれからの時代の必須テーマ。
- これから30年後、駅の役割も変わってくるかも知れない。
- 駅は交通機能に限らず、地域やコミュニティの象徴として重要。
- 駅の新しい形、再定義は、世界中で起こっており、これからの時代の一種のブームになる。

●**その他、まちづくりの視点について（市川委員→隈会長、坂井委員）**

- 2030年の人口構成に注視する必要がある。多摩ニュータウンでは、高齢の問題がある。
- まちの活気がなくならないよう、若い世代が入り続けるよう、バランスが取れて、ダイナミズムが感じられるまちにすることが課題。
- まちの魅力として若者を引き付けていくというのが、非常に重要な要素。若い人を取り入れ、まちの新陳代謝を図ることが重要。
- 学校があるまちは、活気があるまち。まちの活気に繋がるよう、学生が街に出てきて、街の人と交流するような仕掛けが必要。

（隈会長）

- 浦和駅は、浦和のコミュニティにとっては非常に重要な場所。
- 駅周辺のリ・デザインが重要なテーマとして見えてきた。
- コロナ後の新しい時代に、浦和というものはどうゆうポジションにあるか、地味で成熟した都市が、これからコロナ後に魅力を発揮してくるという流れがあると思う

以上